

# 大学開放の起源

## — イギリスのセツルメントを中心として —

元 根 朋 美\*

### 1. はじめに

#### 現在の大学開放の動向

現在、社会人に対して行われている大学開放事業には様々な形態が存在している。例えば、社会人入学制度、科目等履修生制度、聴講生制度などにみられる大学に所属する学生として参加するものや、公開講座、宿泊滞在参加型特別講座、公民館などに大学講師が出向き講義を行う出張講座などその場限りで誰でも自由に参加できるものがある。こうした多様な開放事業はひとつの大学の中で行われている場合もある。しかしながら、こうした多様な開放事業は講座の開講期間や受講生の立場が異なっているものもあれば同じものもある。また実際に大学の公開講座に参加した社会人に対する調査では、一度限りの講座では導入にすぎず物足りない、専門分野を学ぶにはカルチャーセンターでは十分でない、カルチャーセンターとの区別がよくわからないという声もあり、特性を明確に見出すことが困難であることがうかがえる<sup>1</sup>。内容も大学の教授陣が研究内容を講演する講座、外部講師を招聘し資格取得を目標にする講座、メイクやダンスの講座などが混在している。このように、大学の開放講座には体系化されていないものや概説的なものも多く、必ずしも大学の特性が十分に反映されているとはいいがたく受講者側の不満も少なくない。つまり、現在の大学開放は大学以外の学習機関との差異化がはかられていないのであり、その原因の根底には、大学開放の理念の形成が未だ不十分な状態にあることを指摘することができる。大学開放とは大学外のニーズをいかに大学に取り込み、本来の大学の理念に基づいた全体構想をいかに構築するかということと共応していなければならないと考える。

そこで、本稿では、大学開放の起源といわれるイギリスの大学開放に立ち戻り開放講座の型を整理することでそれぞれの開放事業に要請されているものは何であるかを解明したい。

### 2. イギリスの大学開放

十九世紀のイギリスでは、大学が「39か条<sup>2</sup>」に署名するなど入学における教会主導の宗教的制約により、大学で学ぶことができるものは国教徒に限られていた。しかし、産業革命により新たな勢力として誕生した中産階級からの大学開放の要求が高まっていた。

イギリスの大学開放を意味する「大学拡張 (University Extension)<sup>4</sup>」は、大きく大学内部へ拡張するものと大学外部へ拡張するものに分類することができる<sup>5</sup>。

### 3. 内部と外部とに分類される拡張

#### 3-1. 大学内部へ拡張

---

\* 社会生活環境学専攻

大学内部へ拡張するものは、大学の門戸開放が該当する。内部への拡張は、閉鎖的な大学に対する宗教的制約からの開放と、入学制限の撤廃などによる入学の機会を与える門戸の開放である<sup>6</sup>。こうした内部への拡張は1834年の議会で大学開放法案が提出されたことから始まる。この案は議会通過には至らなかったが、非国教徒や女性、労働者階級を除く上流階級や中流階級の国教徒に対してのみ門戸が開かれていた閉鎖的な特質を持つ当時の大学に対し大学宗教審査法の廃止を求め、国教会に属さない学生の入学を許可したものであった。その後、オックスフォード大学法（1854年）、大学宗教審査法（1871年）により非国教徒に対する入学許可は実現した。また、ケンブリッジ大学よりも大学拡張の開始時期が遅れたといわれるオックスフォード大学において、大学拡張は「大学に受け入れる学生の拡大による教育機会の拡大」であり、大学は「国民のための教育機関」<sup>8</sup>と捉えられていた。その後1850年頃より聖職者を目指す貧しい家庭の学生に対する受入れの模索が始まった<sup>9</sup>。当初この模索は実現しなかったが、1868年に貧しい青年達のためのキブル・カレッジが設立され、さらに高額な費用がかかる大学寮に属さない学生の受入れも行われた<sup>10</sup>。

こうして、入学の機会を与える門戸開放として分類できる大学内部への拡張の起源は、現在も文部科学省中央教育審議会答申「大学等における社会人受入れの推進方策について（答申）<sup>11</sup>」などにみられるように、社会に「一層開かれた機関」が目指されている。また、具体的な方策として社会人に対する特別入学試験制度や科目等履修生、長期履修制度、遠隔授業、奨学金制度、学費・授業料減免制度などがあり、内部への拡張の起源は現在も継続されていることがわかる。

### 3-2. 大学外部へ拡張

大学外部へ拡張するものは、大学の外で行われる活動が該当する。外部への拡張には「巡回講座」や「出張講座」、「セツルメント」などがあげられるが、こうした大学の外で行われる活動は2つに分類することができる。一つは、「巡回講座」や「拡張講義」にみられる「要請を受けて出向く」活動であり、もう一つは「セツルメント」にみられる「自ら地域の改良や研究のために出向く」活動である。

## 4. 大学外部へ拡張する2つの活動

### 4-1. 「要請を受けて出向く」活動

「要請を受けて出向く」活動には、J. スチュアートの教授団が大都市間を巡回する逍遙大学構想に代表される「巡回講座」や「拡張講義」<sup>12</sup>などが該当する。きっかけは1873年「婦人高等教育促進北部イングランド協議会（the North of England Council for Promoting the Higher Education of Women）」による講演の要請であった<sup>13</sup>。

これら「巡回講座」や「拡張講義」の学習形態は、①連続講義、②クラス、③論文、エッセーの作成、④試験から構成されている。①連続講義は、コースに連続性を持たせ、教育の重点は原理的側面に置かれており、「如何なる場合にも、単独講義は与えられない」「各種教育機関や協会が行う一般民衆講義によくみられる非連続講義といったこともおこなわれない」<sup>14</sup>ことから、ケンブリッジでは特徴として12回の連続講義を行っていた。他にも通常コースの手がかりとなるショート・コースとよばれる2～6回の講義や、セッションナル・コースとよばれる15～24回の講義

も行われていた。②クラスは、講義時間外に行われる質問や議論などインフォーマルな形で行うもので、全員が出席ではなくおよそ半分の熱心な聴衆（講義に参加する人）が参加していた<sup>15</sup>。③論文、エッセーの作成は大学拡張の特徴の一つとされており、そこには、書くという作業を通じて学生に独学する訓練をつける目的や自己認識を深める目的などがあった<sup>16</sup>。④試験は大学の水準を維持する機能と、安易に大学拡張のレベルを落とさない機能を持っていた。そのため、試験はすべての受講生が受験できるものではなく、大学側が三分の二以上のクラス出席と論文提出などから作成したリストに入らなければ受験資格を得ることができない厳しい基準が設けられていた。最後に試験に合格すると大学から修了証書が与えられた。修了証書はコースの修了を証明するものとなり、受講生に魅力と安定を与えたと考えられている<sup>17</sup>。

しかしながら、こうした「要請を受けて出向く」活動にも問題点が生じている。

運営のための資金は要請側の地方が負担していた。そのため大学側の負担は少なく、長期にわたる継続は容易であったが、講座内容の決定権は資金負担をしている地方側にあった。1876年に設置されたオックスフォード大学の常設委員会は、自発的に拡張コース運営のために組織された独立団体である地方センターと連携し拡張講座を実施していた。常設委員会の役割は教育水準を保証することであり、地方センターの役割はコース実施に対する責任と資金を集めることであった。そのため受講生を多く集めるために人気に左右された内容の講座が実施され、コースの連続性や体系性の維持が困難となる問題も生まれた<sup>18</sup>。さらに「大学は構外教育部を設立すると、構外教育に関する責任はそれで果たされたと考え、それ以降は構外教育部に任せてしまった」<sup>19</sup>ことから大学から構外教育を切り離していった。

以上のように「巡回講座」や「拡張講義」は、当初コースに連続性や体系性があり教育の重点が原理的側面におかれていたことから大学以外の学習機関との差異化が図られていた。しかしながら受講生を集めるための人気に左右された講座の実施によりそうした特性が失われ、結果として他の各種教育機関や協会が行う一般民衆講義によくみられる非連続講義と同様のものとなり、区別があいまいになったと考えられる。

現在、「巡回講座」や「拡張講義」は「公開講座」として大学構内や大学構外の公民館やホールなどで行われているが、その内容は体系化されておらず、一回限りのものや概説的なものが多く他の教育機関との差異もあいまいである。また、それに対する受講者側からの不満にみられる問題点も存在する。このような問題は、起源に立ち戻って考えると受講生の人気に左右された講座の実施により生じていると考えられよう。従って「公開講座」の問題解消には、再びコースに連続性や体系性をもたせ、教育の重点が原理的側面となる講座内容を検討する必要があると考えられる。例えば、現在、文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に選定された帝塚山大学の取組みの一つに「英語による奈良観光ガイド人材養成プログラム—発信型英語の習得で奈良を海外に紹介」がある。この、奈良の国際化と活性化に寄与する英語観光ガイドのスペシャリストを育成するプログラムは、3つの科目群からなる9科目を週10時間、12週にわたるカリキュラムを組んでいる<sup>20</sup>。第一期は、少数精鋭で鍛える25名の募集人数に対し約14.5倍の361名の志願者があった<sup>21</sup>。つまり、ここにはコースに連続性があり明確な目的が存在することに対する受講生のニーズがあるといえよう。また、現在開講されている公開講座には無料のものも多い。そこには資金集めによる人気講座の開設との関係は薄くなる。従って、連続性や体

系性を持たせたコースの再検討は有用なものであると考えられよう。

#### 4-2. 「自ら地域の改良や研究のために出向く」活動

「自ら地域の改良や研究のために出向く」活動には大学セツルメントが該当する。セツルメント運動は、中産階級の大学教師や学生などが東ロンドンの貧困者の居住地域とともに居住し、住民の生活や自立に向けた支援や社会改良運動として知られている<sup>22</sup>。大学セツルメントが他の団体と異なる特徴は、「コレジ・ミッション<sup>23</sup>を下地にしていること、産業の中心地に教育の中心である大学が存在すること、人々の状況を改善しようとする大学人の意志の上に成り立っている」ことである<sup>24</sup>。ただし、大学セツルメントは金銭的援助のみのコレジ・ミッションと異なり、人的支援も必要であった。また、宗教派閥に陥らない人材集めにも工夫する必要があった。

1873年以降、ケンブリッジ大学はJ. スチュアートらにより「巡回講座」や「拡張講義」による労働者に対する教育機会を提供していたが、これに対しオックスフォード大学は慎重であった。その要因の一つは、国教会の聖職者を養成する大学の世俗化に対する懸念や国教会の存在であるといわれている<sup>25</sup>。そのためオックスフォード大学の拡張講義は1885年以降の開設となった。この間、ケンブリッジ大学は大学教育の要求が多い大きな都市や町に既に講座を開設していた。従って、講座未開設の地域は大学教育の要求が少なく小さい町や地域となり、このような地域では講座開設の資金提供も期待できなかった。しかしながら、拡張講義の開設が後進となったオックスフォード大学はこうした貧しい地域に対し「多くの要求に対応した教育を供給するだけでなく、教育に対する需要を刺激する」<sup>26</sup>という趣旨をもって進出しようとした。こうして新たに拡張講座を開設しようとしたオックスフォード大学であったが、直前に大学セツルメントを創設した。最初のセツルメントは1884年に東ロンドンに設立されたトインビー・ホール（Toynbee Hall）である。拡張講義はケンブリッジ大学が先行する形で始まったが、大学セツルメントはオックスフォード大学が先行する形で始まった。最初のセツルメントの創設にはオックスフォード大学とケンブリッジ大学がともに協力した「東ロンドンにおける二大学のセツルメント」協会が携わった。しかしながら、創設の主導はオックスフォード大学の卒業生やドンたちであった<sup>27</sup>。

この大学セツルメントも、創設に向けて「東ロンドンにおける二大学のセツルメント」協会におけるオックスフォード大学、ケンブリッジ大学のそれぞれの立場による大学セツルメントに対する考えにより、二つの型に分類することができる。一つはオックスフォード大学型であり、もう一方はケンブリッジ大学型である。それぞれを、場所、教育についての考え方、方針、目的で分類すると次のような特徴に分類することができる。

### 5. 二つのタイプに分類される「自ら地域の改良や研究のために出向く」活動

#### 5-1. オックスフォード大学型

先述の通り、オックスフォード大学による拡張講義の開設は、先行のケンブリッジ大学が既に行っている都市や町を除くと、教育要求が少なく公開講座の資金提供を期待できない小さな町、貧しい地域での講座開設となった。しかし、オックスフォード大学は「教育に対する需要を刺激する」趣旨を持っており、国家の教育全体の指導的地位を目指し、その教育は地域の若者に向け、若者を未来の労働者と捉え、自立した労働者を育成することを目的としていた。また、大学



セツルメントを社会に役立つ制度ととらえていた<sup>28</sup>。

つまり、大学セツルメントが社会に役立つ制度であり、地域の若者の育成を主としたオックスフォード型は、地域への社会貢献の立場をとっているといえよう。さらに国家の教育全体の指導的地位を目指す方針は、拡張講義においてオックスフォード大学が国家の指導者を育成する志向を持っていることと重なっている。ベルリン大学創設の際、近代大学の理念を提唱したフンボルトは、啓蒙君主国家が市民に干渉し市民を機械化することは市民の自発性を損なうことから、国家の活動には限界がありそれを超えることは害にしかならないことを述べている<sup>29</sup>。フンボルトの言葉を借りるならば、自立した労働者の育成は国家の活動に有益となると捉えられよう。従って、オックスフォード型は人的育成を通じた地域への社会貢献と国家の活動への貢献の立場をとっていると思われる。

## 5-2. ケンブリッジ大学型

大学セツルメントの創設に向けて共に協力したオックスフォードとケンブリッジ大学には合意する部分と異なる部分とが存在した。ケンブリッジ大学は研究と教育によって成り立つ大学を目指し、地域の若者を現役の労働者と捉え、教育活動は彼ら若者の日々の活力となるよう娯楽を提供する活動を目的としていた。その教育は大学新卒の若い卒業生に向けられており、セツルメントは若いレジデント達にとっての調査や問題解決を行う教育施設であり、大学人を育成する場としてとらえられていた<sup>30</sup>。

つまり、大学セツルメントを実践研究の場としたケンブリッジ型は、大学人の育成の立場をとっているといえよう。また、実践研究の場を目的としているケンブリッジ型は、拡張講義において大学が労働者教育を実施することは、大学人が労働者に直接触れることによる学問の深化に繋がると考えていたことから研究の場の立場をとっていると思われる。その一方で、ケンブリッジ大学は教育の機会提供をすすめていく中で社会のニーズに柔軟に対応し、大学教育への機会提供の立場をとっていたが、女子への学位授与が遅かったことから正規の教育と機会提供とは区別する立場をとっていたと考えられている<sup>31</sup>。以上のことから、ケンブリッジ型はレジデントの研究、育成を重視する立場をとっていると思われる。

## 6. おわりに

大学以外の学習機関との差異化がはかられていない現在の大学開放の問題を大学開放の起源といわれるイギリスの大学開放に立ち戻り、開放講座の型を整理した。

その結果、大学内部への拡張は現在も同じ目的を持って継続されていたが、大学外部への拡張の一つである「要請を受けて出向く」活動はその起源の持つ特質が失われ、現代と同じ問題を持っていることがわかった。また、「自ら改良・研究の為に向く」活動では、その目的が、地域の若者に対しての育成と地域に入るレジデントの育成との大きな違いがあったが、「東ロンドンにおける二大学のセツルメント」協会として二つをあわせて考えるならば、実際の社会であるセツルメントという実践の場において、地域の若者を育成する立場とレジデントを育成する立場とが相互作用をもたらすことで研究と実際の融合につながるのではないだろうか。したがって、大学以外の学習機関との差異化がはかられ、且つ、特性を持った開放事業には、連続性や体系性が

あると同時に研究と実際の融合が図られる講座の開設が求められていると思われる。

## 注と引用文献

- 1) 前平泰志, 渡邊洋子「成人の学習ニーズと学習スタイルに関する調査」報告書, 2005年, および, 平成19年9月18日から4日間開催された「京都大学シニアキャンパス2007」において, 参加受講生に対し, 一般的に大学で行われている開放講座についての調査を行った結果による。
- 2) 英国国教会1563年制定。オックスブリッジの場合も「教会ではなく, 大学が「39箇条」への同意を教職員と学生に要求した」。従って, 大学に入学するには「国教に服従すること」が求められるようになった。香川正弘「近世の大学拡張の構想と実践」『佐賀大学教育学部研究論文集』1980年, 28(1-1), p. 23, 小堀勉「英国大学拡張運動の原初形態の研究——大学改革運動との関連を中心として——」『名古屋大学教育学部紀要, 教育学科』1966年(13), p. 32.
- 3) 小堀, p. 32.
- 4) 先行研究の多くは, イギリスの大学開放を「大学拡張」としているが, 高井寛は, 本稿で用いている区分「内部への拡張」を「大学開放」, 「外部への拡張」を「大学拡張」と用語を分類している。高井寛「地域社会に貢献する大学開放の在り方——オホーツク・大学間交流協議会の事例をととして——」『教育学雑誌』2001年, 第36号, p. 2.
- 5) 中道厚子「大学開放——イギリスの歴史から学ぶ——」『大谷女子大学紀要』2002年36, p. 107, 小堀勉, pp. 30-31, 高井, p. 2.
- 6) 「中への拡張」はL. アシュビー等に代表される, 中道, p. 107.
- 7) 当時の大学は高額な学費を要し, 宗教や階級, 男性中心等であった。(cf. ヘースティングズ・ラシュドール・横尾壮英訳(1966)『大学の起源(上)——ヨーロッパ中世大学史——』東洋館出版社, 土井貴子「19世紀末オックスフォードにおける大学拡張の実態と問題点」『中国四国教育学会教育学研究紀要』2001年, 第47巻第1部, p. 198.
- 8) 川添正人「英国大学拡張運動研究—その2(遺稿)」『地域総合研究』1998年, 25(2), p. 15.
- 9) 同上, p. 19.
- 10) 当時の学生は学寮に属していたが, 学寮の費用は高額なものであった。そのため, 近隣の宿舎に居住しながら大学に通う学生の受入れも行われた。また, 貧困学生のために, 1868年にベリオル・ホールが開設されている。ラシュドール, 土井, p. 199, 川添, p. 18, 25.
- 11) 平成14年2月21日
- 12) 香川は加えて「夏期講習会」, 「夏期学校」, 「チュートリアル・クラス」もあげている。「チュートリアル・クラス」に関しては, 香川自身が「拡張コースの発展線上にあったと考える」と述べているため, 本稿では提示していない。
- 13) 香川正弘「十九世紀英国大学拡張運動の研究——拡張講義の構成要素を中心として——」『広島大学教育学部紀要・第一部』1971年(20), p. 176, 経緯は宮本洋子「英国大学セツルメント創設に関する研究——大学改革と「トインビー・ホール」の設立」2000年, pp. 46-47
- 14) 香川, 1971年, p. 179.

- 15) 香川, 1971年, p. 180.
- 16) 香川, 1971年, p. 180, 土井, p. 200.
- 17) 香川, 1971年, p. 180, 土井, p. 200.
- 18) 香川, 1971年, p. 180, 土井, p. 200, 202.
- 19) 川添正人「英国大学拡張運動研究: その1」『地域総合研究』1997年24 (2), p. 33.
- 20) 時間割りは, 月曜から金曜まで, 毎日10時~12時10分の間に2時間。月曜~木曜は講義, 金曜は学外での臨地演習を実施, さらに月曜は午後に1時間の特別講演が10回開催されている。
- 21) 現在, 第4期の志願者数は184名である。志願者数は第2回以降少し減少しているが, これは前回までの志願者数のデータと共に, 選抜合格者の英検, TOEIC のレベルを開示した影響があるともみることができる。実際に, 第2回目以降の志願者の英検, TOEIC レベルは, 第1回のレベルよりも上回っている。
- 22) 現在, セトルメント (settlement) は, 辞書 (岩波国語辞典第五版) では「貧しい人が多く住む区域に定住し, 住民と親しく触れ合ってその生活の向上に努める社会運動。 また, そのための宿泊所・授産所・託児所などの設備。」と定義されているが, 社会福祉では「援助者がスラム街や工場街に住み込み, そこの住民を対象に行う援助活動」の立場, 現在のセトルメント活動者には「現代では, 活動の形を変え「生活の向上」といったところから, 「楽しい時間を共有する」という方面に目的が変わってきている」との立場もみられる。
- 23) コレジに関わる「よき仕事」の一つ。宮本はバーネットによるコレジ・ミッションの活動内容を次のようにまとめている「多くのミッションは, 通常, ロンドンのイースト・エンドやその地域のような労働者階級の多く住む地域で仕事をするよく知られた牧師が, あるコレジを訪問することから始まる。牧師は在学生に貧困者の状態を話し, 共感を呼ぶ。コレジでは委員会が結成される。その委員会は, ミッションのために寄付を決定し, 教会区の牧師や教会組織等との様々な交渉の後, コレジのかつての一員であった若い牧師が, 一つの教会区のミッション副牧師として任命される。(略) 彼は直ぐに教会区の訪問や母親教室, クラブなどの通常の教会組織を整え, 援助の意志をもった彼のかつての同輩の中から補佐役を向かえる。一定の期間をおいて, 彼は活動成果報告書を作成し, もし全てがうまくいけば, どのように地域が教会区になったかを, 最終的にはコレジへ報告することができる」宮本洋子「英国大学セトルメント創設に関する研究 —大学改革と「トインビー・ホール」の設立」2000年, p. 109.
- 24) 宮本, 2000年, pp. 111-112.
- 25) 宮本, 2000年, p. 51. 地方試験の開設に関しても, 宗教試験の廃止による紛糾が影響していた。
- 26) 宮本, 2000年, p. 49.
- 27) 宮本「アーノルド・トインビーの経済学研究の意図: 大学人に与えた学問的刺激の存在」『奈良女子大学教育学科年報』2000年, 11, pp. 121-140, 宮本, 2000年
- 28) 宮本, 2000年, pp. 165-183.
- 29) 西村貞次 (1990)『フンボルト』清水書院, pp. 42-46, 藤平恵郎 (1972)「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと18世紀」『明治大学教養論集』1972年68号, p. 47.

30) 宮本, 2000年, pp. 165-183.

31) 宮本, 2000年, p. 51.



# The Origin of Open University with Settlements in England

MOTONE Tomomi

This research is the classification with the idea of the origin of the Open University with settlements in England and the needs of the Open Universities.

At the first, the author examined the origin of Open University in its fundamental conditions of settlements in England.

The Open University of England can be classified into two classes according to attending lectures and some aims, “the extension to the inside of the campus” and “the extension to the outside campus”. The extension to the outside can be classified into two classes. One of two classes is “the activities meet the needs for community” and the other class is “the activities improved regional and research for residents of universities”. “The activities improved regional and research for residents of universities” has Oxford University type and Cambridge University type.

This paper concludes that “the extension to the inside of the campus” was found to be continuing with the same propose today, but “the extension to the outside of the campus” has lost the characteristics of origin of the Open University, have found that the same problem today.